

## キャンプの個別プログラムと不登校生徒

菅原 利昭<sup>1</sup>・小玉 功<sup>2</sup>・森 敏隆<sup>3</sup>・齊藤 詔司<sup>1</sup>・諫山 邦子<sup>4</sup>・奥山 洸<sup>4</sup>・加藤 敏之<sup>4</sup>

<sup>1</sup>北海道立厚岸少年自然の家 <sup>2</sup>釧路市立北中学校 <sup>3</sup>釧路市教育委員会 <sup>4</sup>北海道教育大学釧路校

### A study for each camping activity and school refusers

Toshiaki SUGAWARA<sup>1</sup>, Takashi KODAMA<sup>2</sup>, Toshitaka MORI<sup>3</sup>, Syouji SAITO<sup>1</sup>,

Kuniko ISAYAMA<sup>4</sup>, Kiyoshi OKUYAMA<sup>4</sup> and Toshiyuki KATO<sup>4</sup>

<sup>1</sup>Hokkaido Akkeshi Children's Center, Akkeshi 088-1113, Japan

<sup>2</sup>Kushiro Kita Junior High School, Kushiro 085-0003, Japan

<sup>3</sup>Board of Education, City of Kushiro, Kushiro 085-8505, Japan

<sup>4</sup>Hokkaido University of Education, Kushiro 085-8580, Japan

#### Summary

The purpose of this study was to evaluate each camping activity, with regard to the effects on the school refusers, who participated in a seven-day camp at Akkeshi Children's Center conducted in 1999.

The daily activity was evaluated in accordance with 4-item checklist by students in each day, and the impression of each camping activity was measured in accordance with another 4-item checklist by them before and after the camp.

In measurement of impression, Cluster Analysis on sub-programs showed that they were sorted in several groups reasonably. In the daily evaluation of activities by each student, the feeling of their tiredness got obviously decreased day by day.

#### 1. 問題

児童生徒に望ましい変化をもたらすとされる長期冒険型のキャンププログラム<sup>1) 2)</sup>は、通常多くの個別プログラムから構成されている。同じ長期冒険型でありながら、効果をもたらすプログラムと、それほど効果をもたらさないプログラムがある<sup>3)</sup>。このことは、キャンプの効果を考える際に、個別プログラムやそれらの構成の仕方まで含めて分析する必要があることを意味する。目的や環境的、人的資源という条件に応じた適切なプログラムを開発するという実践的な観点からも、このような分析は不可欠である。

われわれは1997年度より北海道立の青少年教育施設で行われている不登校生徒を対象としたリフレッシュ事業が長期冒険型であることに注目し、1998年実施のプログラムについて分析を行った<sup>4) 5)</sup>。その際、上述の観点から、プログラム総体の効果のみでなく、参加した生徒による個別プログラムに対する評価も分析した。事前と事

後に行った4件の評定にもとづくクラスター分析の結果、プログラムを構成する17個の個別プログラムは、主要な部分、副次的な部分、あるいは準備的ないし総括的部分などに分類できること、また学校環境に対する生徒の適応状態に応じて個別プログラムの与える印象が異なることなどが明らかになった。

北海道立の青少年教育施設では、1998年に続いて1999年にも、不登校生徒を対象とするリフレッシュ事業を行った。これも前年と共通する部分の多い長期冒険型プログラムを内容とするものである。本研究では、先の報告<sup>4) 5)</sup>に引き続き、個別プログラムに焦点を当てて、1999年のキャンププログラムの効果を検討する。14個の個別プログラムを前年と同じ技法で分析することにより、前年と同様の分類結果が得られるかどうかを見ることが当面の関心である。

今回はこれに加えて、毎日の活動についての生徒の自己評価も分析する。個別プログラムが1ないし4個ずつ配置される毎日の活動の自己評価により、プログラム全

体の効果と個別プログラムとの関係について、新しい情報の得られることが期待される。

## 2. 方法

### 2.1. プログラムの概要

概要 1999年10月12日より18日までの7日間、厚岸少年自然の家を主な会場として実施した。不登校の小学生1名(男1名)、同じく中学生17名(男11名、女6名)、不登校の中学生のための適応指導教室を担当する教諭3名(男1名、女2名)、ボランティアの大学生5名(男1名、女4名)、計25名が参加した。プログラムの概要は表1の通りである。

### 2.2. 調査対象者

調査対象者を表2に示す。小学6年の男子1名と、遠隔地から参加した中学3年の男子1名を除くと、残りの16名は全て釧路市適応指導教室に在籍する中学生である。これらのうち、小学6年の男子1名と、遠隔地から参加した中学3年の男子1名、釧路市適応指導教室に在籍する中学3年の男子1名、女子1名、計4名は1998年のプログラムも経験している。

### 2.3. 調査票および手続き

2.3.1. 個別プログラムの評価 プログラム全体を構成する個別プログラムの中の14個について、個々の生徒の事前の予想(期待と不安)、および事後の感想(良い印象と悪い印象)を調べた。事前の期待の程度を見るために、プログラム開始の当日、それぞれの内容を簡略に口頭で説明した後、あらかじめ印刷した個別プログラム名の中から、「楽しみにしている活動」、「特に楽しみにしている活動」を、重複選択や選択数は制限せず、参加者に選択させた。そして「楽しみにしている活動」として選択され

た場合1点、「特に楽しみにしている活動」として選択された場合2点を与え、選択されなかった場合は0点とした。同じく事前の不安の程度を見るために、「不安を感じる活動」、「特に不安を感じる活動」を選択させ、同様に処理した。

またプログラム終了の当日、「良かった活動」、「特に良かった活動」、および「悪かった活動」、「特に悪かった活動」を選択させ、同様に処理した。なお、事後の場合、内容についての口頭の説明は行わなかった。

用いた調査票の形式、ならびに手続きは、先の報告<sup>4)</sup><sup>5)</sup>と同じである。

2.3.2. 活動の自己評価 毎日の活動の評価は、1998年のプログラムについてもすでに試みている<sup>6)</sup>。これはボランティアとして参加し、班活動のリーダーを務めた4名の大学生が、それぞれの班のメンバーである3、ないし5名の生徒を対象として、1日の活動の特徴を7項目にわたって評価したものであった。しかしこの手続きでは、班間、すなわち大学生個人間の評価基準の共通性が必ずしも保証されていないという難があり、また評価者にとっては負担の多い作業であった。

そこで今回は評価の形式を生徒自身による自己評価に変え、また項目数も4個に減らした。そして評価作業が、生徒自身にとって意味のある総括活動となるように配慮した。実際に使用した調査票の形式は資料に示す通りである。このうち、1日の気分を色で表現させる前半部分は今回の分析対象とはしない。分析の対象とする後半の4項目は、「楽しさ度(以下、楽しさ)」、「つかれた度(以下、疲労感)」、「仲良し度(以下、連帯感)」、および「やったぜ!度(以下、達成感)」など、生徒の日常的な言語感覚と違和感の少ない表現を採用している。「振り返りカード(以下、調査票)」という表現もこのような配慮にも

表1 プログラムの概要

	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
第1日目 10/12(火)					開会式	野外炊飯 (出会い編)			ナイト ハイク	入浴 自由	就寝			
第2日目 10/13(水)	トレッキング		かけ登り	トレッキング			夕食	入浴	自由	就寝				
第3日目 10/14(木)	厚岸湖 カヌー体験		移動準備・バス移動			山小屋 清掃	夕食	自由	就寝					
第4日目 10/15(金)	登山						バス移動	夕食	リフレッシュ タイム	就寝				
第5日目 10/16(土)	バス 移動	別寮辺牛川カヌー川下り					バス 移動	夕食	パーティ 作戦会議	入浴 自由	就寝			
第6日目 10/17(日)	乗馬体験		買い出し			野外炊飯 (お別れ編)			ファイヤー ストーム	入浴 ・自由				
第7日目 10/18(月)	思い出作り		閉会行事 ・昼食											

表2 調査対象者

	小学6年	中学2年	中学3年	計
男子	1	7	4	12
女子			6	6
計	1	7	10	18

とづくものである。調査票は A-5 版の画用紙に印刷された。

評定作業は、毎晩の「振りかえりタイム」で行われた。これは就寝前の 2、30 分を費やし、班毎に班のリーダーとメンバーが話し合うために設けられた時間である。生徒による自己評定は、このような話し合いのきっかけとなることが期待された。同時に 5 点満点の評定結果を、毎日の生徒の活動の指標として利用することにしたのである。1 日 1 回、計 7 回の評定を求め、最終日には 7 日間全体についての評定も求めた。なお、全体についての評定は、今回の分析の対象としない。

### 3. 結果と考察

#### 3.1 実際のキャンプの経過

表 1 に示したプログラムが実施された経過を次に示す。提示する資料は、プログラムの全過程に参加した厚岸少年自然の家スタッフによる記録<sup>7)</sup>である。

1) 野外炊飯(出会い編) 新しい環境の中で、協力して料理を作り、共同の食事を楽しみながら、お互いの交流を図る小集団活動であった。

…班ごとでカレーライスをつくった。自分たちで野菜を洗い、切り、煮込むといった作業を行った。まず、炭おこしから始まった。炭と薪と新聞紙だけで火をおこす作業はなかなか大変だったが、どの班も勢いよく火をおこすことができた。午後 4 時過ぎから始まった出会いのパーティは、まわりが暗くなってくる中での炊飯であったが、参加者達は班のメンバーと協力してカレーライス作りを楽しんだ。カレーのにおいがだんだんと立ちこめて、食欲をそそった。また、御飯も自分たちで炊いたが、どの班もいい具合に炊き上がり炊飯の準備は順調に進んだ。同じ材料でカレー作りに挑戦したが、それぞれの班で微妙に味がちがいで、各班の特徴が出たカレー作りであった。他の班のカレーを食べくらべたりと、和やかなうちに出会いのパーティが終わった。

2) ナイトハイク 施設周辺の夜の探索をする中で、お互いの交流を図る小集団活動であった。

…後片付けと休憩の後、ナイトハイキングを行った。自然の家から遊歩道を通って愛冠(アイカップ)岬までの往復のコースを班ごとでハイキングした。このコースは、森林に囲まれた遊歩道を通りぬけるもので、暗闇の中を約 1 時間、懐中電灯をたよりに歩いていくものである。大人でもためらう闇で、スタートした途端に悲鳴が響いたりするなど、ちょっとしたスリルを味わったナイトハイクであった。

3) トレッキング 海岸、林道、湖岸のコース約 20km を歩いた。登山にむけた準備活動の意味を持ち、冒険的要素や、協力、協調のモチーフも含む小集団活動であった。

…9 時 30 分頃に自然の家を出発し、遊歩道を歩きながら筑紫恋(ツクシコイ)海岸へ向かった。途中にはチェックポイントもあり、「班員の合計が 100g となるように一人 1 個石を拾おう」などの問題に挑戦した。筑紫恋海岸からは、林道を抜けて床潭(トコタン)へ向かった。床潭では、休憩を兼ねて昼食をとり、おにぎり 2 個だけであったが、体を動かしたあとのおにぎりは格別においしかったようである。

…(昼食後のがけ登りを終えて)林道を抜け厚岸湖の湖岸までおいてくるコースを進んだ。途中には山葡萄や鹿の糞なども見られ、さりげなく自然にふれあいながらのウォーキングとなった。厚岸湖の湖岸へ降りる時は、視界がさっと開ける感じで、今までずっと木に囲まれながら歩き続けてきた参加者には、特に厚岸湖の景色は一層その素晴らしさを強く感じたようである。湖岸を通過してチカラコタンまで到着したあとは、ここからゴールの自然の家までは、班ごとに全く違う 5 つのコースをたどってそれぞれの班でウォーキングを続けた。各班に渡された地図をたよりに、厚岸の街中を班のメンバーの協力で進んで行った。途中では班全員がおさまっている写真を厚岸町の人に撮ってもらおうというチャレンジもあり、思いきって家を訪ねてお願いする班もあり、他人と関わろうとする勇氣も見受けられた。午後 4 時 30 分から午後 5 時 30 分の間には、5 つの班が無事自然の家までたどり着き、約 20km のウォーキングの全活動を終えた。

4) がけ登り トレッキングの途中に設定され、登山にむけた準備活動の意味を持つ個人活動であるが、予想したほどの負荷は与えなかった。

…昼食後は、ローブをたらし床漕の掛けをヘルメットを着けて登って進むというコースにチャレンジした。この掛けはかなりの急斜面で、怖がって脱落する参加者も出るのではないかとの予想もしたが、見事全員がけの上まで登りきり、大黒島をバックにした記念写真におさまることができた。

5)厚岸湖カヌー体験 静水上のカヌー漕艇を行った。後に行う川下りの準備活動の意味を持つ小集団活動であった。普段交流のない2名を1組にすることにより、精神的負荷が意図的に高られていた。

…午前中は、バスで厚岸湖のB&G海洋センターの艇庫へ移動し、カヌーの基礎をB&Gの指導員2名から指導を受けた。…2人1組でカナディアンカヌーに乗りこみ、パドルを手に厚岸湖へ出て行った。はじめは2人の呼吸がかみ合わず、思った方向に進まないペアもあったが、次第に全てのカヌーがスピードにもりながら、カヌーを操ることができるようになった。救助艇に連れられて帰ってくるカヌーや沈するカヌーもなく、カヌーの水洗いの後始末も協力しながらてきぱきと進んでいた。若干肌寒い中での活動であったが、弁天島へあがったり、対岸へ向けて遠くまで漕いだりと、楽しい活動になった。

6)登山 リスケ山、西別岳、摩周岳を縦走した。全プログラム中で身体的負荷が最も高く、冒険的要素の大きい個人活動であった。脱落者が出ることも予想されたが全員が完遂した。

…気温も低く風も冷たく、しばらくすると耳が痛くなるような気候であった。出発前には、「自分の体力に挑戦しよう」ということと「全員が摩周岳まで登り、第一展望台のゴールで会うことができるように」という二つの目標を確認した。午後8時過ぎに登山口からスタート。あくまでも自分のペースでということで、班活動ではなく個人の挑戦という意味で、列のどのあたりから出発するかも全て個人の選択に任せてスタートした。

この縦走コースは、登山口からすぐに急な勾配へさしかかるため、体が慣れていない参加者にとっては、かなりつらいものとなった。先頭は標茶(シベチャ)山岳会の方の先導で進んだが、最後尾の女子2名は徐々に前の集団と間隔が開き、「もう、いやだ」などとの言葉も早くに聞かれた。しかし、参加者のペースにあわせながら、大人数が最後

尾の生徒と一緒に進んでいった。最後尾の生徒が、「がまん坂」をこえ、最初のリスケ山に到着した時には、既に先頭のグループは西別岳へ向かっている途中であったが、リスケ山から一望する根釧台地は紅葉している木々もみられ、また振りかえると下には摩周湖も広がり、思いもよらぬ素晴らしい景色に最後尾の2人も感激していた。また、「ここまで来たからには、もう最後まで登りきるしかない！」という登山に対する前向きな言葉も聞かれ、同行していた大人も元気付けられた。西別岳では、全員が揃うのを待って記念写真を撮り休憩した。が、冷たい風が強く、短い休憩でとりあえず摩周分岐を目指して進んだ。摩周分岐に着いたところで昼食をとった。出発前には、体力の問題や分岐からのぞんだ摩周岳に圧倒されて、この先の挑戦を断念する参加者が出てくるものと予想していたが、昼食後の出発の合図に、誰も拒否の意を表さず、最後の摩周岳へと全員が向かった。摩周岳は、頂上に近づくにつれて険しい登りになるが、それぞれのペースで、またリーダーのボランティアの支えなどもあり、全員が見事、摩周岳の頂上に立つことが出来た。なかには山頂についた途端、感極まって泣き出す参加者も何人かいた。

「昨年参加したとき、摩周岳に登るのはあきらめてしまっただけ後悔した。だから、今年は絶対に登るんだ」という声や「三つの山の頂上に立てて、うれしかった」などの声…「登山で自分に自信を持つことが出来た」とか「登山をきっかけにこの7日間を最後までやり抜こうと思った」という参加者の声も聞かれた。摩周岳を下山し、ゴールの第一展望台へと向かう途中は、小雨にもあつたが一人の脱落者もなく、参加者全員自分の足で、長い縦走をやり抜いた。全員がゴールしたのは、午後4時頃であった。

7)リフレッシュタイム 登山を終えた日の夜を個室で過ごした。身体的、精神的なくつろぎを意図した個人活動であった。

…一人に一部屋を提供し、翌日の朝のつどいまでの時間を、出来るだけ他人とかかわらず過ごすということにした。

8)別寒辺牛(ベカンベウシ)川カヌー川下り 流水上の漕艇をした。転覆の危険に加えて、普段交流のない2名を1組にして、精神的負荷を意図的に高めた小集団活動であった。強風のため、中断した。

…トラックにカヌー用具一式を積み込み、バスで上流の始

発点へ移動した。2人1組となり、カナディアンカヌーでの川下りに挑戦した。…川下りはすっかり秋の気配になった別寒辺牛川をゆったりくんだりながらの楽しいものとなった。うまくカヌーが操れず他のカヌーにぶつかっていったり、川岸の木に引っかかって危うく沈しそうになったりするペアもあったが、順調に中間点へ向けて進んでいった。この川下りで、話す機会が増えて人間関係が近づいたペアや、きまづい人間関係をどうにか克服しようという様子のペアも見られた。前日の登山でやはり体力を使ったのか、強風のため予定の終点までのゴールを切り上げて、中間点で終了としたが、参加者からは満足したという意見が多かった。

9)パーティ作戦会議 野外炊飯（お別れ編）にむけた話し合いをした。お互いの交流を意図した小集団活動であった。

…班ごとで翌日の「さよならパーティー」のメニューについて話し合った。中には、当日食べるまでの極秘のメニューもあり、班員の間もだいたい打ち解け、楽しい雰囲気の中で明日に向けての計画が進められた。

10)乗馬体験 牧場で乗馬をした。前日の川下りで与えられた高い精神的負荷による影響を和らげるアニマルセラピーに類する効果を意図した個人活動であった。

…町内の牧場へバスで移動し、午前中一杯、乗馬体験をした。各班一頭の馬が与えられ、牧場の方の指導のもと、ブラッシングをして馬とコミュニケーションを図ることから始まった。…馬を怖がる参加者はいなく、それぞれの馬の名前を呼びながら、馬の全身に丁寧にブラシをかけていた。その後、鞍をつけていよいよ乗馬になった。はじめは馬を引いてもらいながら一人一人馬に乗った。次第に慣れてくるにしたがって、一人で馬を動かして進む参加者もいた。やはり、動物の力であろうか、参加者の表情も和み、雰囲気も暖かいものへと変わった。鹿の子や猫などにも興味を引かれる参加者もいた。

11)買い出し 野外炊飯（お別れ編）で用いる食材の買い出しをした。日常的活動の中でお互いの交流を図る小集団活動であった。

…乗馬の後、バスで厚岸サティアーに向かい、昨日班で話しあったパーティーの食材の買い出しをした。限られた予算

で、電卓を片手に、売場をあちこちまわって必要な食材を集めていた。予定に無かった食材までかごに入れてたっぷり食料を買いこんだ班もあった。どの班も楽しそうに買い物をしていった。

12)野外炊飯（お別れ編） 協力して料理を作り、共同の食事を楽しみながら、お互いの交流を図る小集団活動であった。

…（買い出しの後）自然の家に戻ってから、さらに班ごとで最後のうち合わせをして5時30分「開店」へ向けて準備にとりかかった。炭おこし、食材を洗ったり、切ったり、加工したりなどの準備をどこの班もいきいきと行った。あぶなっかしい手つきでみじん切りをしたり、ハンバーグのひき肉を楽しそうにこねている男子や、変り種のサンドウィッチを作っている班など、さよならパーティーへ向けてムードが盛り上がっていった。5時過ぎになると、出来あがってくる班もあり、いい匂いが立ち込めた。ハンバーグ、焼きそば、お好み焼き、サンドウィッチなどの定番のメニューはもちろん、スパゲッティ、ラーメンやフライドポテトなどの野外炊飯ではめずらしいものから、果ては闇鍋まで登場し、色々な味が楽しめる「さよならパーティー」になった。

13)ファイヤーストーム たき火、フォークダンス、個人の決意表明、写真の鑑賞を行った。緊張とくつろぎ、感動と反省、集団活動と個人活動、これらのいずれの要素も含む総括的な行事であった。

…（「さよならパーティー」の後）体育館でファイヤーストームを行った。火の神に扮した参加者が松明を掲げて入場し、始まった。各班の代表へ「勇気の火」「友情の火」などを火の神が松明に分火し、薪木へ点火した。フォークダンスも盛り上がり、全員の決意表明へと進んだ。一人一人が事前に書いた感想文を皆の前で読み上げて火にくべて決意を新たにするものである。これまでのことが胸に迫り涙と共にこれからの決意を話す参加者もいて、厳肅でかつ感動的な場面であった。「親学校へ戻れるよう頑張ろうと思う」「自分の将来の夢は野球選手です」などという決意が披露され、その場の全員が何かを感じ取ったファイヤーストームであった。この後、これまでの活動の様子の写真を見たりなど、最後の夜をゆっくり楽しんでいった。

14)思い出作り 前日鑑賞した写真から1枚を選び、自然

表 3 生徒による個別プログラムの評価

	平均 (標準偏差)	n=18	事前の期待	事前の不安	事後の良い印象	事後の悪い印象
第1日目：野外炊飯（出会い編）	⑩0.56(0.70)		⑩0.56(0.70)	③0.39(0.61)	⑦1.17(0.79)	⑨0.22(0.43)
ナイトハイク	⑤0.78(0.81)		⑤0.78(0.81)	⑤0.61(0.70)	⑨0.94(0.73)	⑩0.17(0.38)
第2日目：トレッキング	⑩0.22(0.55)		⑩0.22(0.55)	⑥0.56(0.51)	⑩0.72(0.57)	②0.50(0.79)
がけ登り	⑩0.56(0.78)		⑩0.56(0.78)	②0.94(0.94)	③0.56(0.62)	④0.39(0.61)
第3日目：厚岸湖カヌー体験	④0.89(0.90)		④0.89(0.90)	④0.89(0.90)	③1.50(0.71)	⑬0.06(0.24)
第4日目：登山	⑬0.28(0.67)		⑬0.28(0.67)	①1.00(0.77)	⑥1.28(0.89)	⑥0.33(0.59)
リフレッシュタイム	③0.94(0.80)		③0.94(0.80)	②0.17(0.51)	⑩0.67(0.77)	③0.44(0.70)
第5日目：別寒辺牛川カヌー川下り	②1.06(0.87)		②1.06(0.87)	④0.89(0.90)	⑧1.06(0.87)	⑧0.28(0.57)
パーティ作戦会議	⑬0.28(0.57)		⑬0.28(0.57)	⑩0.22(0.55)	④0.39(0.70)	①0.56(0.70)
第6日目：乗馬体験	①1.33(0.84)		①1.33(0.84)	⑦0.50(0.79)	②1.61(0.61)	⑬0.06(0.24)
買い出し	⑩0.39(0.70)		⑩0.39(0.70)	⑬0.11(0.32)	⑫0.61(0.70)	⑧0.28(0.57)
野外炊飯（お別れ編）	⑩0.56(0.70)		⑩0.56(0.70)	⑨0.28(0.46)	②1.61(0.70)	⑥0.33(0.77)
ファイヤーストーム	⑩0.56(0.70)		⑩0.56(0.70)	⑩0.22(0.65)	④1.39(0.78)	⑬0.06(0.24)
第7日目：思い出作り	⑩0.56(0.51)		⑩0.56(0.51)	⑭0.06(0.24)	⑤1.33(0.69)	⑭0.00(0.00)

注：○で囲んだ数値は得点順位

の素材でフォトスタンドを作った。くつろぎと反省の要素を含む創作活動であった。

…記念品作りは、前日に見た写真の中から、自分の好きな写真を一枚選び、それを収める「フォトスタンド」を作った。どんぐりや松ぼっくりや枝などの自然の素材を使いながら思い思いにフォトスタンドを仕上げていった。お気に入りの一枚に、個人の写真やグループでの写真より、全員での集合写真を選ぶ参加者が多く、この6泊7日で苦楽を共にした仲間としての一体感が育まれた一つの表れと考えられる。

### 3.2 個別プログラムの分類

3.2.1. クラスタ分析 生徒によるプログラム内容の評価を見るために、まず事前の期待、事前の不安、および事後の良い印象、事後の悪い印象のそれぞれについての平均値を求め、これらを個々の活動についての評価得点とした。これを表 3 に示す。次にこれにもとづき、都市ブロックを距離とし、最遠隣法を用いたクラスタ分析を行った。これを図 1 に示す。

図 1 において、距離 12 で切断すると、A、B、および C の 3 つのクラスターに分類される。また距離 8 で切断すると、クラスター A はサブグループ a と a' に分かれ、B は b と b' に、C は c と c' に分かれる。

A はファイヤーストーム・思い出作り・野外炊飯（出会い編）・野外炊飯（お別れ編）・厚岸湖カヌー体験・乗

馬体験の 6 件を含む。これらの多くは事後の良い印象の値が高い（それぞれ順位 4、5、7、2、3、および 2）。また多くは事後の悪い印象の値が低い（それぞれ順位 13、14、9、6、13、および 13）。a（ファイヤーストーム・思い出作り・野外炊飯（出会い編）・野外炊飯（お別れ編））と a'（厚岸湖カヌー体験・乗馬体験）を比べると、a は野外パーティとそれに関連する活動であり、a' は主要ではあるが冒険的要素の少ない活動である。事前の期待の値が、a（それぞれ順位 10、10、10、および 10）は a'（それぞれ順位 4、および 1）より低い。また事前の不安の値も、a（それぞれ順位 11、14、8、および 9）は a'（それぞれ順位 4、および 7）より低い。

B はトレッキング・パーティ作戦会議・リフレッシュタイム・買い出しの 4 件を含む。これらは事後の良い印象の値が低い（それぞれ順位 10、14、11、および 12）。また多くは事後の悪い印象の値が高い（それぞれ順位 2、1、3、および 8）。a（トレッキング・パーティ作戦会議）の活動内容の類似性を見出すことは難しいが、a'（リフレッシュタイム・買い出し）は、個人の活動の自由度が比較的高いという特徴がある。a は事前の期待の値が低く（それぞれ順位 14、および 13）、かつ事後の悪い印象の値が高い（それぞれ順位 2、および 1）。a' は事前の不安の値が低い（それぞれ順位 12、および 13）。

C はナイトハイク・別寒辺牛川カヌー川下り・がけ登り・登山の 4 件を含む。いずれも冒険的要素を特徴とした活動で、事前の不安の値が高い（それぞれ順位 5、4、

2、および 1)。c (ナイトハイク・別寒辺牛川カヌー川下り) は c' (がけ登り・登山) よりも身体的負荷の低い活動と言えよう。c の事前の期待の値は高く (それぞれ順位 5、および 2)、c'は低い (それぞれ順位 10、および 13)。

3.2.2.1998 年との比較 1998 年の場合<sup>4)</sup>、主要な個別プログラムの中では、乗馬体験に事前の期待が高く、事後の印象も良かった。冒険的要素を含む登山、厚岸湖カヌー体験、別寒辺牛川カヌー川下りについては、事前の不安が強かった。これらは今回も同様の傾向を示している。主要なもの以外では、個人の行動の自由度が高いリフレッシュタイムに対して、事前の期待が高いにもかかわらず事後の印象は悪かった。これも今回、同様に認められる結果である。

1998 年には、主要な個別プログラムの中で、身体的負荷の高い登山はそうではない別寒辺牛川カヌー川下りに比べて、事後の印象が悪かった。今回はこれが逆転しているようである。身体的負荷の高い活動に対する否定的な反応は、今回の場合、トレッキングについての結果で見られる。

1998 年のプログラムの中の日常的な学習活動に類似した活動 (山岳会会員の講話) に否定的な反応が生じていたが、今回のプログラムには、この種の活動は含まれていなかった。

今回の結果で、野外炊飯 (お別れ編)・ファイヤーストーム・思い出作りという、プログラム全体の最終部分に置かれ、キャンプの締めくくりに役割を果たす個別プログラムが、日立って良い印象を残している。これは 1998 年には見られなかった。こうした結果には、個々の個別プログラムの効果のみでなく、そこに至るまでのプログラム全体の効果が含まれているはずである。そこで次に効果の時間的な変化をたどって見よう。

3.3.活動の自己評価

3.3.1.個別の指標の変化 図-2に活動の自己評価の結果を示す。分散分析の結果、楽しさの平均値に有意な変化が認めれた (F(6,125) =2.85,p<.05)。LSD 法を用いた多重比較の結果、第 2 日、および第 5 日の値は、いずれも第 3 日、および第 6 日の値より低かった (Mse=0.66,p<.05)。

疲労感の平均値も有意に変化した (F(6,125) = 16.38, p<.01)。同じく多重比較の結果、第 1 日の値は、第 3、5、6、および 7 日より高かった。第 2 日の値は、第 3、4、5、6、および第 7 日の値より高かった。第 4 日の値は、第 3、5、6、および第 7 日の値より高かった。第 7 日の値は、他の全ての日の値より低かった (Msc=1.20,p<.05)。

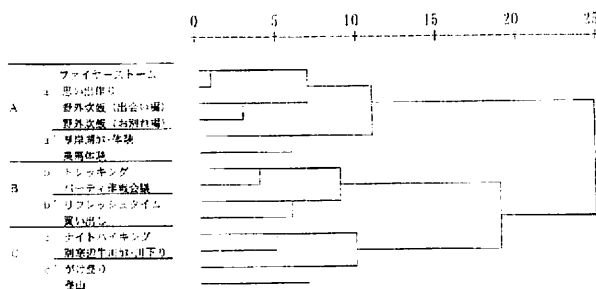


図 1 個別プログラムの分類

連帯感の平均値も有意に変化した (F(6,125) =4.31, p<.01)。同じく多重比較の結果、第 6、および 7 日の値は、第 1、4、および 5 日の値より高かった。第 6 日の値は、これに加えて第 3 日の値より高かった。第 2 日の値は、第 5 日の値より高かった (Mse=0.61,p<.05)。

達成感の平均値も有意に変化した (F(6,125) =4.36, p<.01)。同じく多重比較の結果、第 1 日の値は、第 2、4、および 6 日の値より低かった。第 5 日の値は、第 2、3、4、6、および 7 日の値より低かった (Mse=0.58,p<.05)。

3.3.2.個別プログラムとの関連 第 1 日の個別プログラムは、野外炊飯 (出会い編)とナイトハイクで、いずれも身体的負荷は低かった。それにもかかわらずこの日の疲労感が強いのは、その内容が精神的要素の大きいものであったことをうかがわせる。第 2 日は、行程 20km におよぶトレッキングとその途中に配置しがけ登りで、身体的負荷は高かった。疲労感が高水準を維持し、また達成感が強まっている。第 3 日は厚岸湖カヌー体験で、精神的負荷を高めることが意図されていた。しかし、むしろ楽しさは強まり疲労感は弱まっている。第 4 日は登山とリフレッシュタイムで、高い身体的負荷とその後のくつろ

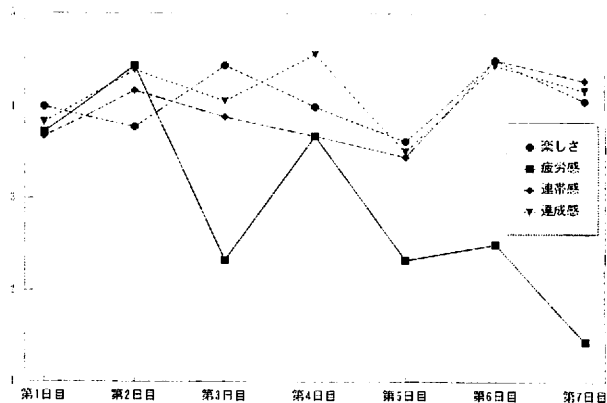


図 2 活動の自己評価

ぎが意図されていた。疲労感は再び強まり達成感も強まっている。第5日は別寒辺牛川カヌー川下りとパーティ作戦会議で、高い精神的負荷とその後の終局へむけた準備が意図されていた。疲労感は再び弱まるが、楽しさ、連帯感、達成感も弱まっている。この日の漕艇は強風のため予定の行程の半ばで終わった。このことがこれらの結果に反映されているのかもしれない。また日程が半ばを過ぎるこの時点は、個人間、個人と集団間の葛藤が露わになりがちな時期でもある。肯定的な活動の指標がいずれも低下したのは、そのような葛藤のためかもしれない。質的な情報を補う必要がある。第6日は乗馬体験、買い出し、野外炊飯（お別れ編）、ファイヤーストームで、身体的、精神的負荷の低い総括的行事であった。楽しさ、連帯感、達成感が強まり、疲労感は弱い。第7日は、思い出作りで、身体的、精神的負荷の低い創作活動であった。楽しさ、連帯感、達成感は強く、疲労感はさらに弱まっている。

日程全体を通じて顕著なのは、楽しさ、連帯感、達成感という肯定的な指標が、多少の増減はあるものの高い水準を保ったことと、疲労感という否定的な指標が確実に低下したことである。このことは、今回のプログラムが全体として、生徒に対する望ましい効果を与えたことの裏付けになると思われる。

## 文 献

- 1)飯田稔・坂本昭裕・石川国広 (1990) : 登校拒否中学生に対する冒険キャンプの効果. 筑波大学体育科学系紀要, 13, 81-90.
- 2)飯田稔・中野友博・関根章文・布目靖則 (1993) : 登校拒否中学生に対する3年間の実験キャンプが親子関係に及ぼす影響. 筑波大学野外運動研究, 9, 37-47.
- 3)森敏隆・諫山邦子・奥山洸・加藤敏之 (1999) : 野外体

験が自己概念におよぼす効果. 釧路論集, 31, 213-222.

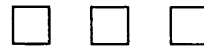
- 4)奥山洸・諫山邦子・加藤敏之・齊藤詔司・菊池和孝・森敏隆 (1999) : キャンプ経験が不登校生徒に与える心理的影響. 野外研究, 3-1, 25-36.
- 5)奥山洸・諫山邦子・加藤敏之・齊藤詔司・菊池和孝・森敏隆 (1999) : キャンプの個別プログラムに対する不登校生徒の評価. 環境教育研究, 2-1, 19-26.
- 6)釧路市学校適応指導学級「青空学級」編 (1999) : 不登校生の早期学校 (集団) 適応を求めて—直接体験・交流学习の拡充を通して—. 釧路市立北中学校, 31-35.
- 7)北海道立厚岸少年自然の家 (1999) : 事業内容要旨, 北海道立厚岸少年自然の家, 2-7.

## 資料 振りかえりカードの書式

### 振りかえりカード

( ) 班 名前 ( )

○今日一日の活動は、自分にとってどうでしたか。□の三つのマスに自分の気持ちを表現する色をぬって下さい。



○今日一日の自分にぴったりする数字に○をつけて下さい。

※ (1が一番低く、5が一番高いポイントです。)

☆楽しさ度	1	2	3	4	5
☆つかれた度	1	2	3	4	5
☆仲良し度	1	2	3	4	5
☆やったぜ!度	1	2	3	4	5